

生田緑地の種子植物相の変遷

吉田 三夫*

The change of the seed plant aspect in Ikuta-Ryokuchi
Park, Kawasaki City

Mituo YOSHIDA*

I はじめに

ウマノスズクサ科のタマノカンアオイのタイプロカリティは武蔵登戸、現在の生田緑地乃至はその付近である。原記載者は牧野富太郎であった。川崎市出身の植物学者原松次は生田緑地乃至はその付近の植物リストを残しており、久内清孝の生徒達も同様な地域の植物リストを残している。近年ではキノコ学者の今関六也も生田緑地で観察会をおこなっている。横浜植物会や牧野植物同好会なども生田緑地で現在でも観察会を行うこともある。

このようにこれまでに多くの植物学者や菌類学者、それらのグループそしてアマチュアなどが生田緑地に足を踏み入れている。それ故に多くはないが、過去の植物リストが残されている。

川崎市自然環境調査報告Ⅲ(1994)では3年かけて生田緑地種子植物リストを作成して過去に作成された五つのリストを併記している。植物相の変遷にまで及ばなかったのは、調査地域が生田緑地のみのものもあるが、生田緑地とその周辺を含むものがあり、比較できないと判断したからである。この調査の初めの一年間は筆者が担当したが異動になってしまった。当初の目的の一つに生田緑地の植物相の変遷があった。調査地域が生田緑地を含むという広範な地域のリストは昭和7年と11年のものである。その後のものは生田緑地のリストであるので、多少無理があるかも知れない。しかし、敢えて生田緑地の植物相の変遷として比較の試みをする。

II 植物リスト

A 武蔵登戸附近植物目録(1932・昭和7年) 帝国女子医学薬学専門学校校友会 調査地域 広範囲

B 武州向丘村植物誌(1936・昭和11年) 原松次 調査地域 広範囲

C 川崎市北部地区の植生(目録) 一生田緑地・稚児の松(1967・昭和42年) 鈴木正

D 川崎市生田緑地の植生(目録)(1967・昭和42年) 梶山三千男

E 川崎市生田緑地植物目録(1973・昭和48年) 川崎市土木局

F 川崎市生田緑地の種子植物目録(1994・平成6年) 吉田多美枝・科野有紀・種子植物班

Fの目録調査を行いこれらの文献を表にしてまとめたのは吉田多美枝、科野有紀、種子植物班の方々であり、かなりの労作である。この報告の元資料になっているので、ここに謝意を表したい。

III 植物相変遷の視点と結果

リスト発行年は1932,1936,1967,1973,1994年と等間隔ではなくばらつきがある。特に1936年から次の1967年までは約30年の間隔があるので、昭和10年前後のものと昭和42年以降のものとを比較してしまう傾向が出てきってしまうが、1 昭和10年前後にあつて近年はない自生植物、2 近年、増えている帰化植物、3 かつてあつたが近年はない帰化植物の三つの視点で植物相の変遷を観たい。

1 近年ない自生植物、かつてあつた植物

ガマ科 ヒメガマ、ガマ

ヒルムシロ科 エビモ、ヒルムシロ、ヤナギモ、

オモダカ科 アギナシ、ウリカワ

トチカガミ科 ヤナギスズタ、クロモ、トチカガミ、ミズオオバコ、セキショウモ

イネ科 ムツオレグサ、ヌメリグサ

カヤツリグサ科 ハタガヤ、オニナルコスゲ、エナシヒゴクサ、クロカワズスゲ、ナルコスゲ、アゼナルコ、ケスゲ、ヤガミスゲ、ミコシガヤ、カワズスゲ、コハリスゲ、ムギスゲ、ヤブスゲ、タガネソウ、アオガヤツリ、クログワイ、シカクイ、アゼテンツキ、マツカサススキ

ホシクサ科 ヒロハイヌノヒゲ、ホシクサ、シロイヌノヒゲ

ミズアオイ科 コナギ

ユリ科 アマナ、ウバユリ

ラン科 クマガイソウ、カキラン、オニノヤガラ、ヨウラクラン

ドクダミ科 ハンゲショウ

イラクサ科 ミズ、イラクサ

タデ科 ノダイオウ

ナデシコ科 カワラナデシコ、フシグロセンノウ、フシグロ

*川崎市青少年科学館

スイレン科 ジュンサイ、ハス、コウホネ、ヒツジグサ
マツモ科 マツモ
キンポウゲ科 ニリンソウ、クサボタン、オキナグサ、
 バイカモ
ツツラフジ科 オオツツラフジ
ケシ科 ジロボウエンゴサク
アブラナ科 ヤマハタザオ、ユリワサビ
ユキノシタ科 ヤマネコノメソウ、イワボタン、ウメバ
 チソウ
バラ科 ダイコンソウ、ズミ、クマイチゴ
マメ科 クサネム、タヌキマメ、フジカンゾウ、ノアズ
 キ、レンリソウ、ミヤコグサ、ツルフジバカマ、オオ
 バクサフジ
ミカン科 マツカゼソウ、キハダ
トウダイグサ科 ノウルシ、シラキ
アワゴケ科 ミズハコベ
モチノキ科 ウメモドキ
ニシキギ科 ツルマサキ
クロウメモドキ科 ケンボナシ、クロツバラ、クロウメ
 モドキ
ツバキ科 サカキ
オトギリソウ科 ヒメオトギリ
スミレ科 シロスミレ
ジンチョウゲ科 コガンピ
アカバナ科 ヒシ
アリノトウグサ科 アリノトウグサ、ホザキノフサモ
セリ科 ミシマサイコ、ホタルサイコ、ツボクサ、ヤマ
 ゼリ、カノツメソウ
サクラソウ科 ノジトラノオ
ガガイモ科 スズサイコ
シソ科 オドリコソウ、メハジキ、ヒメサルダシコ、ミ
 ゾコウジュ、ヤマツツナミソウ、ツルニガクサ
ゴマノハグサ科 ミゾホオズキ、コシオガマ、ヒメトラ
 ノオ、ゴマノハグサ、オオヒナノウスツボ、ヒキヨモ
 ギ、イヌノフグリ
アカネ科 ホソバノヨツバムグラ、フタバムグラ
スイカズラ科 ソクズ
レンプクソウ科 レンプクソウ
マツムシソウ科 マツムシソウ
ウリ科 ゴキズル
キク科 ヒメヨモギ、アズマギク、オグルマ、タカサゴ
 ソウ、オカオグルマ、タムラソウ

上記のガマ科、ヒルムシロ科、トチカガミ科、スイレ
 ン科などの植物はかつて水田が広がり、小川が流れ、沼
 や池が多かったことを教えてくれる。マツムシソウから
 は草原があったことが推察できるし、他の植物からは、
 手入れされた雑木林が今よりも広く残っていたことが想
 像できる。

水田や沼や池は埋め立てられて宅地化して、このよう
 な立地が無くなり、水辺の植物も消滅してしまったのだ
 ろう。丘陵地にも宅地造成の波は押し寄せて、雑木林の

植物も姿を消さざるを得なかったようだ。

これらの植物の消滅は特に、昭和30年から32年をかけ
 ての神武景気、同34年から翌年にかけての岩戸景気など
 昭和40年後半にまで続いた所謂、高度経済成長時代によっ
 て、川崎市南部は重工業地帯になり、北西部は住宅地域
 になったことに起因していると考えられる。

2 近年増えてきた帰化植物

イネ科 オニウシノケグサ、シラゲガヤ
ツユクサ科 ムラサキツユクサ、オオムラサキツユクサ
アヤメ科 ニワゼキショウ
ヒユ科 ホソアオゲイトウ
ナデシコ科 ノハラナデシコ
ケシ科 ナガミヒナゲシ
アブラナ科 オオアラセイトウ
ベンケイソウ科 メキシコマンネングサ
フウロソウ科 アメリカフウロ
スミレ科 ヒメスミレ
ミソハギ科 ホソバヒメミソハギ
シソ科 ヒメオドリコソウ
ナス科 センナリホオズキ、アメリカイヌホオズキ、ワ
 ルナスビ
ゴマノハグサ科 アメリカアゼナ
キク科 オオブタクサ、ベニバナボロギク、チチコグサ
 モドキ、ウスベニチチコグサ、ウラジロチチコグサ、
 ブタナ

3 近年はない帰化植物

タデ科 ソバカズラ、ソバ(帰化とした)
アカバナ科 マツヨイグサ

ソバカズラ、マツヨイグサは生田緑地にはないが、他
 の地域では生育している。ソバは逸出でかつては栽培さ
 れていたものが、野生化していたのだろう。

4 まとめ

昭和10年前後のリスト二つと昭和40年代のリスト三つ
 と平成6年のリスト一つを比較したが、昭和10年前後に
 あった植物は昭和40年代にはなくなっていた。帰化植物
 が増えたといっても、それ程の数ではない。消滅してし
 まった植物は多く、それらの原因は宅地造成などに因っ
 ている。

引用文献

吉田多美枝・科野有紀・種子植物班(1994) 川崎市生
 田緑地の種子植物目録・川崎市自然環境調査報告Ⅲ：
 pp.99-118 川崎市教育委員会